

ハンブルクのヤレシュタットの建築的特徴. ヴァイマル期ドイツのジードルンクにおける地域性の一考察

海老澤模奈人^{*1}

A study on the architectural characteristics of *Jarrestadt* in Hamburg:
Focusing on the regionality of the housing estates in Germany during the Weimar period

Monado EBISAWA^{*1}

In this paper the formation and characteristics of architecture of *Jarrestadt*, a housing estate constructed in Hamburg in the late 1920s, are described. This article consists of four parts. The first part (Chapter 2) gives an overview of the development of the mass housings in Hamburg during the Weimar period. The second part (Chapter 3) focuses on the design competition for the building of *Jarrestadt*. The ten Architects selected in the competition participated in the planning of *Jarrestadt* and each of them designed one housing block. In the third (Chapter 4) and fourth part (Chapter 5) two architectural characteristics of *Jarrestadt*, namely the form of housing block and the brick wall, are discussed. In *Jarrestadt* all apartment blocks enclosed a large courtyard to supply a good residential environment to dwellers. A unique rule, namely to open at least one (upper) part of building for the better residential condition, made a difference in the planning of the housing blocks. On the other hand the architects were obligated to use bricks for exterior walls of buildings reflecting the architectural tradition in Hamburg. These two characteristics gave the housing estate not only the unity but also an interesting variety among the buildings.

1. はじめに

ヴァイマル共和国時代(1919-33)のドイツでは、第一次世界大戦後の住宅不足を解消し、より多くの国民に居住環境の良い住居を提供するために、ジードルンクと呼ばれる住宅団地が各都市で建設された。経済的かつ機能的な住居を大量に供給する目的から、ジードルンクの建築には装飾の少ない近代的な建築表現がしばしば用いられた。その点でジードルンクは1920年代に確立される近代主義(モダニズム)の建築を代表するビルディング・タイプの一つであった。当時のモダン・デザインが追求した社会とのかかわりという側面にも、ジードルンクという課題は合致するものであった。

ヴァイマル期ドイツでとくに多くの住宅が建設された都市として、ベルリン、フランクフルト、ハンブルクが挙げられる。この中でハンブルクは、1919-32年に約85,000戸が新築され、ベルリンやフランクフルトと比肩する建設数を誇りながらも、この2都市と比べるとジードルンクの主要都市としての知名度は低い。その理由として、ベルリンのブルーノ・タウトやフランクフルトのエルンスト・マイのような世界的に知られる近代建築家がいなかったこと、加えて建築家の選定に地元志向が見られること、また建築のデザインや住棟計画にもやや保守的な面があり、これまでの近代建築史では大きく取り上げられなかった

ことなどがあると考えられる。しかし逆に考えれば、そのようなハンブルクの建築の特徴にヴァイマル期ドイツのジードルンクの幅の広さが見て取れるとも言える。しばしばインターナショナル・スタイルの実践例と目されるジードルンクという建築タイプにおいて、地域性が表れた一例がハンブルクと言えるだろう。本稿ではハンブルクのジードルンクの代表例であるヤレシュタットの建築的特徴を論じることで、この問題を考えてみたい。

ヤレシュタットは、1926年の設計競技を機に選出された10人の建築家がそれぞれ一つの街区を割り当てられ、共同で実現したジードルンクである(図1)。ジードルン

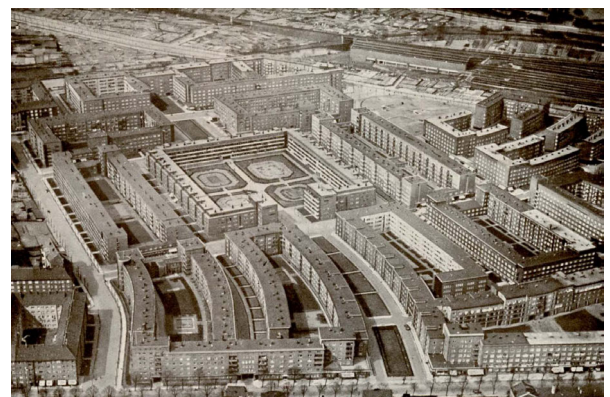


図1 ヤレシュタット 鳥瞰写真(1930年頃)

^{*1} 東京工芸大学工学部建築学科教授
2017年9月26日 受理

ク全体の中で特徴的なのが、カール・シュナイダーが設計した中央の正方形の街区であった。この住棟に代表されるように、街区を囲うように住棟を建て、中庭をもつ住棟の配置形式（本稿では以後、「街区型」と呼ぶ）がヤレシュタットの特徴の一つと言える。また、1920年代後半以降のドイツの多くのジードルンクと異なり、外壁に煉瓦を用いている点も特徴の一つであった。例えば、ヴィンフリート・ネルディンガー編の『20世紀ドイツ建築ガイド』では、「フリッツ・シューマッハーとヴァイマル共和国時代ハンブルクの住宅建設」の項目の説明として、「街区の周囲を囲むような住棟配置と化粧煉瓦の建築という支配的な原則によって、伝統的建築家と進歩的建築家との対立にもかかわらず、新たなジードルンク地区は比較的均質の外観をもつことになる²⁾」と述べており、まさに上述した2つの点がヤレシュタットの建築的特徴を論じる上で重要なポイントであることがわかる。本稿では最初にヴァイマル期ハンブルクの住宅建設の概要と1926年の建設設計競技を中心としたヤレシュタットの成立過程を整理した後、住棟の形式と煉瓦の外壁というこの2つの建築的特徴について、それぞれの歴史的背景や同時代の他の建築との関係を検討することで、考えてみたい。

ヤレシュタットの成立や建築の特徴を包括的に論じた研究は、現地ドイツにおいても少なく、タイプ打ちの私家版の冊子³⁾とヤレシュタット史料館作成の冊子⁴⁾を除けば、管見の限りでは近代ハンブルクの住宅建築全般を扱った学術書の中で一つの事例として解説されるのが主なものである⁵⁾。本稿では、それらの先行研究を参照しつつ、建築雑誌記事など当時の史料もできる限り参照し、ヴァイマル期ドイツ全体のジードルンクの展開を視野に入れながら、ヤレシュタットの建築的特徴を論じることを試みる。

なお、現在ヤレシュタットと言った場合、本稿で対象とする1926年の設計競技を機に成立した西側の地区だけではなく、1930年代初めに建設された東側の地区も含まれる。ただし本稿でヤレシュタットと呼ぶ場合、西地区・東地区と区別する場合を除き、基本的に最初に建設された西側の地区を指すこととする。

2. ヴァイマル期ハンブルクの住宅建設

最初にヴァイマル期ハンブルクにおける住宅建設の概要を述べる。

中世のハンザ同盟都市にルーツをもつハンブルクは、その伝統を守り、1871年成立のドイツ帝国時代、さらに1919年のヴァイマル共和国成立時においても、どこの州にも属さない独立した都市による政治形態を選択した。すなわち、ヴァイマル期ハンブルクは市（Stadt）が州（Staat）となるドイツの中でも特別な政治形態を有する都市の一つであった。それは現在も同様であり、自由・ハンザ都市ハンブルク（Freie und Hansestadt Hamburg）と名乗っている。本稿では、基本的にハンブルク州と呼ぶことにするが、これは領域としては、ハンブルク市と同様である⁶⁾。

第一次世界大戦（1914-18）後のハンブルクは、他の多くのドイツ都市と同様に甚大な住宅不足に見舞われた。その主な理由として、戦時中の建設活動の停止による住宅供給の減少、敗戦後に割譲された旧ドイツ帝国領からの移民の流入、戦後の婚姻の急増による世帯増などがあった。これらの現象は全ドイツ的なものでもあった。実際ハンブルクでは、1919年から1923年にかけて住居を求める世帯数が6,000から37,000世帯に増大したとされる⁷⁾。しかし戦後の混乱や建設資材の欠乏、極度のインフレの進行により、1923年までのハンブルクで新築することができた住宅数はわずかであった。1923年末のインフレの収束後ようやく、1924年2月に導入が決定された家賃税（Hauszinssteuer）の効果もあって、1920年代半ばよりハンブルクにおける住宅建設は軌道に乗っていく。これも他のドイツ都市と同様である。先述したようにハンブルクでは1919-32年に約85,000戸の住居が新築されたが、1926-31年には住宅建設は戦前の状態に復帰し、年10,000戸の新築住居が建設されたという⁸⁾。

ちなみに家賃税とは、1919年までに住宅を建設した住宅所有者に対して課せられた税である。これら1919年以前に住宅を建設し、そのためにローンを負った人びとは、その後のインフレーションでかつての貨幣価値が急落した結果、ローンの返済を容易に行うことができた。このようにインフレで利得を受けた人びとに対し、ヴァイマル共和国政府は、その利得を相殺する目的で特別な税を課した。それが家賃税であった。そしてそこで得られた財源から、住宅建設に多くの資金が回されたのである⁹⁾。

ヴァイマル期ハンブルクの住宅建設を主導した建築家フリッツ・シューマッハーはハンブルクの住宅政策を論じた1928年の雑誌論文の中で、第一次世界大戦前・後の同市の住宅建設の変化を次のように記している。すなわち、第一次大戦前のハンブルクでは、小規模住居（床面積の小さい集合住宅の住戸を指す）の建設はほぼ完全に民間の事業者の手に委ねられており、その結果として建設される住居は衛生面や建築造形面において低いレベルにあった。戦後は、経済的な理由から民間事業者は住宅建設に携わることができなくなり、全面的に建設が停滞した。その状況を打破するために、ハンブルク州が住宅建設のイニシアティブを取るようになった、と¹⁰⁾。

ただし、ハンブルク州が第一次世界大戦後、住宅建設に積極的に介入するようになったと言っても、州が自ら施主となって住居を建設する例は少なかった。その代わりにこの時期のジードルンク建設の施主となったのが、公益的な建設会社や同業組合などであった。その際大規模なジードルンクの場合は、複数の事業者が部分ごとを請け負うかたちで建設がなされることが多かった。それらの事業者は多くの場合、先述の家賃税を原資とする融資を受け、住宅建設に取り組んだ。その点でヴァイマル期ハンブルクの住宅建設に影響力をもったのが、1914年に設立された「ハンブルク抵当権用資金貸付基金（Hamburgische Beleihungskasse für Hypotheken）」（以下、抵当貸付基金）という融資

を請け負う機関である。ある統計によれば、先述の約 85,000 戸の内の 98% はここから融資を受けたとされる¹¹⁾。ヤレシュタットの設計競技を実施したのもこの抵当貸付基金であった。

よく知られるように、ヴァイマル期ドイツの住宅建設では、住居の大量供給と並行して、居住環境の改善も重要なテーマとされた。とりわけ低所得者や労働者などそれまで劣悪な住環境での生活を余儀なくされていた人びとに、採光や通風といった居住の基本条件を満たす住居を提供することが目標とされた。その際に克服すべき対象となったのが、賃貸兵舎 (Mietskaserne) と呼ばれる 19 世紀後半以降の都市発展期に建設された、衛生環境の悪い都市内の高密度の集合住宅であった。「空気、光、太陽 (Luft, Licht und Sonne)」はこの時代の住宅建設のキャッチフレーズとなった。

ハンブルクでは、1918 年 12 月に小住居建設促進法 (Gesetz zur Förderung des Baus kleiner Wohnungen) という新法が制定されている。この法律は、前述の抵当貸付基金の融資対象の基準を明確化するものでもあった。具体的には、階段室を外部に面する位置に配置すること、各階で一つの階段室あたり 3 戸以上の住戸を設けないこと、また、すべての居室に外に面した窓を設けることなどの住宅建築に関する条件を明示し、それを満たす住宅の建設に限りて融資を行ったのである¹²⁾。そのようにして、ただ安く大量に建設するだけではなく、居住環境のよい住居の供給が求められた。

ヴァイマル期ハンブルクの住宅建設に最も大きな影響を及ぼした建築家がフリッツ・シューマッハー (Fritz Schumacher: 1869-1947) である。ドレスデン工科大学教授だった彼は 1909 年にハンブルクに招聘され、1919-23 年のケルン滞在期を除き、1933 年までハンブルクの上級建設監督官 (Oberbaudirektor) を務めた。彼は 1920 年代のハンブルクにおけるジードルンク建設の大半に関与するとともに、都市計画や公共建築の設計など、この時代のハンブルクの発展に多大な足跡を残した。

第一次世界大戦直後の 1919-22 年、シューマッハーは市北部のランゲンホルンに小規模な庭付きテラスハウスや

二住戸並列型住宅 (二つの住居が隣り合い一つの住宅を形成している形式) によって構成されるジードルンクを建設した。現在はフリッツ・シューマッハー・ジードルンクと呼ばれているものである。これは 20 世紀初頭の田園都市運動の影響を受け、当時求められていた低層・低密度のジードルンクを実現した例であったが、このような庭付き低層の住宅形式では、大都市の喫緊の住宅不足を解消できないことをシューマッハーは悟っていく。そして 1923 年以降は小規模住戸を積層させた高層の集合住宅による大ジードルンクの計画にシフトしていくのである。

シューマッハーは、19 世紀に建設された市の中心部の



図2 ハンブルクの新しい8つの居住地区を示した図
(なお、この図のⅠ～Ⅷにヤレシュタットの敷地は入っていない)



Abb. 12. Alter Bebauungsplan von Nordbarmbeck (durchweg fünfstöckige Bauweise ohne Grünzüge)

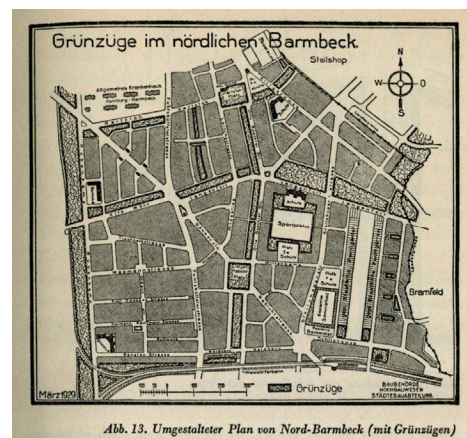


Abb. 13. Umgestalteter Plan von Nord-Barmbeck (mit Grünzügen)

図3 バーンベック北地区の既存の建設計画 (左) と F. シューマッハーの改良案 (右)

周縁に 8 つの新たな居住地区を計画する (図 2)。それを彼は「ハンプルクの古い肉体を取り囲むベルト」と呼んだ。それは彼にとって、「われわれの時代がその建築の意志を表現するゾーン」となるものであった¹³⁾。

シューマッハーの取り組んだ仕事には、これらの新しい居住地区における街区の計画も含まれていた。ハンプルクでは 1892 年の建設計画法 (Bebauungsplangesetz) に基づいて、シューマッハー着任以前に「建設計画 (Bebauungsplan)」という地区の開発計画が都市周縁部にも作成されていた。それを彼は新しい街区に作り直していく。具体的には、居住地区に自然環境を導入するために幅広の緑の道 (空地) を計画し、同時に公共施設の用地も確保した。また、旧計画の街区を分割したり、新しい街路を計画することでジードルンク建設の規模にあった街区が計画された。集合住宅の住棟はこの街区を囲むかたちで建設されるのが標準となった。図 3 はその一例であり、シューマッハーが提案した 8 つの居住地区の一つであるバーンバック北地区の既存の建設計画とその改良案を示している。

ここで 1920 年代ハンプルクの集合住宅の特徴を、ヘルマン・ヒップ著『居住都市ハンプルク』を参考にして列挙してみたい。

1920 年代のハンプルクで建設されたのは、基本的に階段室型の 4~5 階建ての集合住宅であり、各住戸は 1 層の (2 層のメゾネット形式ではない) いわゆる「フラット式」であった。主流となるのは 2 部屋から 3 部屋半の居室をもつ小規模から中規模の住戸であった¹⁴⁾。また上述のように、階段室ごとに 2 住戸が標準となった。

同時代の女性の社会進出や主婦の家事負担軽減の要請などを受けて、台所設備や家具の考案も進められた。さらにジードルンク建設に伴う社会改良的な実験も行っていた。例えば共同厨房をもつ住棟、独身女性用の住棟、老人用住棟などである。これらは多かれ少なかれ他の先進的な都市にも見られた試みである。

すでに述べているように、住棟は街区を囲み、大きな中庭をもつ形式が一般的だった。ただし 1920 年代末になると、当時のドイツで普及してきた平行配置型住棟 (Zeilenbau)、すなわち直線状の住棟を平行に配置する形式がハンプルクでも導入されるようになっていく。この点については第 4 章で論じる。さらにヴァイマル期ハンプルクのジードルンクを他都市から際立たせる要素が、煉瓦を用いた外壁の表現である。この点については第 5 章で論じる。

煉瓦による統一性の一方で、住棟のデザインは一様ではなく、時期や建築家によって違いがあった。ヒップはそれを 3 つの様式的傾向に整理している¹⁵⁾。すなわち、寄棟屋根や出窓など伝統的な造形要素を住棟デザインに組み込む「(1) 伝統主義もしくは郷土様式」、1910-20 年代のドイツで流行した「(2) 表現主義」、同時代の前衛的な建築運動の影響を受けて 1925 年以降増加してくる「(3) ノイエス・パウエン」の 3 つである。(3) は、造形的に見れば、幾何学的なヴォリュームを基本に、装飾を控えて即物的な

デザインを志向するもので、具体的には陸屋根や水平性を強調したバルコニーや窓などにデザイン上の特徴が現れる。ノイエス・パウエンは直訳すれば「新しい建築」という意味で、CIAM (近代建築国際会議) のドイツ語名称にも使われており¹⁶⁾、現在でもこの時代の建築家たちの活動を紹介するときにしばしば用いられる術語である。ヒップらの研究を参考に、本稿でもこの言葉を一つの様式名称として適宜用いることとする。

なお、ハンプルクのジードルンクの住棟で一般に取り入れられた要素として、窓ガラスを横棧で分割する横棧窓 (Sprossenfenster) がある。これはハンプルクの伝統的な窓の形式として、新しい建築表現をとったノイエス・パウエン風の住棟も含めて広く採用された。

ヒップによれば、1920 年代のハンプルクの賃貸住宅の設計には、155 の建築家もしくは建築事務所がかかわっていた¹⁷⁾。複数のプロジェクトを担った建築家は少なく、多くの建築家はただ一つの物件だけにかかわっていたとされる。また当時のジードルンク建設にかかわった建築家の大半はハンプルク出身者であり、彼らの内でハンプルク以外の建設活動に従事する人はわずかだったという。この点にも 1920 年代ハンプルクの住宅建設の特徴が表れている。地元の建築家に広く門戸を開く一方で、ハンプルク外の建築家はあまり受け入れていない。

さて、1920 年代後半に勢いを増したハンプルクの住宅建設であるが、ドイツの他都市と同様に 1929 年の経済恐慌の影響で、1930 年代には再び減少に転じる。そして 1933 年にはアドルフ・ヒトラーのナチ党の政権掌握により、ヴァイマル時代が終わりを迎えるのである。

3. ヤレシュタットの成立：設計競技を中心に

3-1. ヤレシュタット建設設計競技の要項の検討

以上述べたハンプルクにおいて 1926 年に実施されたのが新たなジードルンク、「ヤレシュタット」の建設のための設計競技であった。この設計競技は直接的な実施案を求

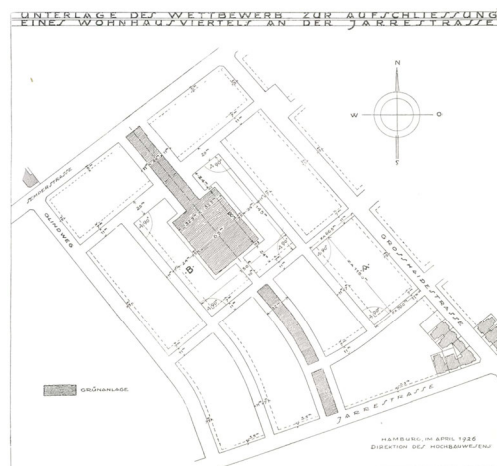


図 4 ヤレシュタット建設設計競技の敷地図

めるものではなかった。ただし、そこで上位に入選すれば、実際のジードルンクの設計者になることができるという点では、実施に結びついたコンクールでもあった。後述するように設計者選定の方法にもハンブルクの独自の試みが表れていた¹⁸⁾。

対象となった敷地は、ハンブルク中心部より北側の地区ヴィンターフーデにあるゼンパーシュトラッセ、グロスハイデシュトラッセ、ヤレシュトラッセ、グリントヴェークに囲まれた矩形の土地で、規模は約250×400mだった¹⁹⁾。なお、「ヤレシュタット」という名称は設計競技の時点ではまだ用いられておらず、当時は「ヤレシュトラッセおよびそれと接合する道路沿いの土地」とされていたが、本稿では便宜上、最初から「ヤレシュタット」と呼ぶことにする。

設計競技の敷地にはフリッツ・シューマッハーにより、図4のように、あらかじめ10の街区が計画されていた。シューマッハーによる街区計画の重点の一つに、前章で触れたように緑地の計画があった。ヤレシュタットでは、敷地全体の中央付近に矩形の広場が配置され、その中心を通るように、南北（正確には南東から北西に傾きを持つ）の緑地帯の軸が設定されていた。この緑の軸は北にある市立公園の緑地へとつながっていくことが意図されていた。なお、図4からは、この敷地に11の街区があるように見えるが、中央の矩形の緑地を挟む二つの区画は東西あわせて一つの街区と考えられていたようで、設計競技の要項にも最終的に10の街区となることが記されている²⁰⁾。

続いて、設計競技の要項²¹⁾の主要な点に言及しながら、ヤレシュタットの建設設計競技に見られるジードルンク計画の特徴を解説したい。

第1項は、この設計競技への参加資格について記している。すなわち、「1926年1月1日時点でハンブルク州域に居住もしくは事務所を構える独立したすべての個人建築家（Privatarchitekten）」が対象とされた。

第2項では、主に住棟の配置と高さの計画について述べられている。街区を囲むように「閉じた建設方法（in geschlossener Bauweise）」（本稿で「街区型」と呼ぶもの）を原則とし、対象地区全体において内側を走る道路に面した部分は低く（4階まで）、外周道路に面した部分は高く（5階まで）することが指示された。つまり、ジードルンク全体の内側から外周部に向けて階段状に住棟が高さを増すことになる。ただしヴォリュームの効果（Massenwirkung）のために、特別な場所では住棟の一部を1～2層分高くして際立たせてもよいとされた。また、街区を囲む住棟において少なくとも1箇所は、最低でも一階段室単位の幅²²⁾、壁を開放する場所を作らなければならないとされた。そのようにしてできた住棟の隙間の地上部分には、1層の店舗などが建設される。また、住棟の仕上げに関して、すべての建築の正面は、硬質煉瓦（Klinker）で覆われるようにすることが明記された。

第3項は住戸平面の計画について規定している。まず規模に関しては、50～60㎡と60～80㎡の規模の住戸を各街

区において、2：1の割合で建設する。前者は基本的に2部屋の住戸で、後者は3部屋の住戸となる。設備に関しては、費用的に可能ならば一部の住戸に浴室をつけてもよいと記されている。各住戸には屋根裏と地下室の一部が割り当てられる。ただし屋根裏を居住階とはしない。一つの階段室に一つの階で3住戸が玄関を持つ形式（第4章で述べるDreispannerの形式）は住棟の角部分の階段室のみに認められる。なお、この要項には計画される総住戸数は記されていないが、当時の雑誌記事では約1,800戸とされている²³⁾。

第4項では設計競技の賞金について記されている。上位10案が入賞となり、2,000ライヒスマルク（以下RM）が授与される。続く10案は購入対象として1,500RMが与えられる。さらにその次の40案は特別手当として500RMが与えられる。なお、応募者は1案のみ応募できるとしているが、完全な協働でなければ他の応募者の案に関与することも可能であると記されている。また共同の事務所を持つ建築家は共同案を作成できるが、その場合は他の作品に関与することができなくなる。

第5項には、設計競技の結果を受けての建築家の選定について記される。ここが同時期のドイツ国内の他のジードルンクと比べて、ヤレシュタットの成立過程において最も特徴的な点の一つかもしれない。第5項の冒頭には、「この設計競技には、適性者のリスト（Eignungsliste）を得る目的がある」と記される。それは次のようなものである。受賞者となった上位10組、および購入対象となった続く10組の名前は、審査委員会が定めた順位に従ってリストに載せられる。上位の10組は設計競技の審査決定後、ジードルンクの全体計画を作成するための共同作業体を結成する。全体の敷地は先述したように10の街区に分割されており、10組の建築家がそれぞれ1つの街区の建設を指揮する。つまりヤレシュタットの建設は、設計競技の上位10名の共同作業となるのである。それにもかかわらず20組までのリストを作成する理由は、上位10組の誰かが抜けた場合の補充要員を確保するためである。また、11～20位までの建築家がヤレシュタットで仕事を得られなかったとしても、抵当貸付基金がかかわる他の建築に動員される可能性もあると記されている。

10組の建築家による共同作業体に取り組む全体計画の方針は、設計競技の審査委員会が定めるとされている。その際、案の作成では、「全体計画の芸術的な統一が成立するように、しかしすべての建築街区があたかも一人の建築家の手になるような印象を喚起させることがないように」することが求められた。第5項では他に全体計画作成にあたっての受賞者同士での意見の相違を仲裁する方法や建築家への報酬などについて記載されている。

最後の項目は、提出物についてである。設計競技では8つの提出物が求められていた。1/1,000の全体の配置図、1/1,000のアクソノメトリック図（以下、アクソメ図）、建物のコーナー部分を描いた外観透視図、さらに図4の中の街区Aと街区Bの標準階の1/200平面図、同じ住棟の1/200

立面図、6階建て住棟の1/200断面図（高さ寸法を記入する）、そして計画案の説明文である。

以上の要項の内容から、ヤレシュタットの建設設計競技に見られる特徴を4点指摘したい。

一つ目は、地域との結びつきである。第1項では参加者をハンブルクの建築家に限定していた。そこにはドイツ全土もしくは他国に門戸を広げない、排他的な地元志向が窺える。その理由の一つとして、地元の建築家に仕事を与える意図があったと考えられるが、同時に地域的な伝統を建築に反映させる意識があったのではないかと考えられる。具体的な地域性の表現として、第2項において、硬質煉瓦の使用が規定されている点は注目される。

二つ目は、住棟の配置計画において「街区型」が優先されている点である。これは前章で述べたように当時のハンブルクで普及していた住棟形式だったが、ヤレシュタットでは街区を囲うことを原則としつつも、完全には閉鎖せずに住棟の一部を開くという独特なルールが示された点が特徴的であった。

三つ目は、設計競技後の設計者の選定方法である。当初から設計競技が単独の設計者を選ぶものではなく、10組の建築家による「共同作業体」を結成するためのものであることが明示されていた。また、設計競技の上位10組が直接的に実施設計者に選出される点も特徴的と考えられる。例えば1928年に実施されたカールスルーエのジードルンク・ダマーシュトックの建設設計競技では、勝者（1位と2位）が全体計画の統括者となり、設計競技後に新たに地元の複数の建築家が設計者として選定されている。それに比べてヤレシュタットの「共同作業体」の選定方法は明快であった。

ヴァイマル期ドイツのジードルンクには、複数の建築家が協働し、設計案を競い合ったプロジェクトが他にもいくつかある。シュトゥットガルトのヴァイセンホーフ・ジードルンク（1927年）など各国の工作連盟による実験的なジードルンクは特別な例としても、例えばベルリンの大規模ジードルンクであるジーマンスシュタット（1929-31

年）やヴァイセ・シュタット（1929-31年）が知られる。とくに前者は住棟ごとに建築家の個性が出ており、その多様性が特徴となっている。一方ヤレシュタットでは「全体計画の芸術的な統一」を目指すと同時に、すべてが一人の建築家の設計によるような印象を喚起させないという両面的な性格を求めている点が注目される。

四つ目は、建築の細部のデザインよりも、ヴォリュームの計画を重視している点である。敷地の全体計画を主に決める設計競技だから当然かもしれないが、例えば、街区ごとの住棟の階数が指定されたり、住棟の一部の階数を変えて建築に変化を与えるなど、全体に立体としての建築の計画に主眼を置いている。これは建築の設計における時代性を表していると言えるかもしれない。そしてそれを表現する手段として、アクソメ図を課している点が興味深い。図5のように、敷地全体における住棟のヴォリュームが上空からの視線として、はっきりとわかる図法となっている。このような視点は、設計競技後に作成される全体模型においても共有されている。

3-2. ヤレシュタット建設設計競技の結果

続いて設計競技の結果について、公表された審査委員会の議事録²⁴⁾をもとに述べる。

審査委員会は1926年10月15日から18日にかけて開催されている。9人で構成された審査委員会には、シューマッハーや抵当貸付基金代表のデ・カペアログが含まれていた²⁵⁾。

期日までの提出案は214案だった。第一次審査において72案が選外となり、続く審査でさらに62案が外された。この時点で残った80案が、続いて2つのグループに分けられた。第1のグループは、受賞（10案）と購入対象（10案）の候補となる作品であり、計30案が選定された。残りの50作品が第2グループとなった。

第1グループの順位を決めるために、4つの観点を審査員が各5点満点で採点し、合計点を算出することになった。4つの観点は、以下のa)~d)である²⁶⁾。

- a) 平面タイプの問題
- b) 都市計画的な配置の問題
- c) 建築造形の問題
- d) 経済性の問題

この採点結果が表にまとめられた。1位から30位まで点数順に列挙され、上記の4点についても各案の得点がわかるようになっている。なお、各案は作品に付されたスローガン（Kennwort）とともに示され、作成者の名前はわからないようになっていた。これは19世紀以来のドイツの設計競技では一般的なやり方である。

このような明瞭な審査方法によって、1等から10等までの受賞作10案、11等から20等までの購入対象10案、そして第2グループのさらなる審査を経て、補欠の40案が選出された。ただしこの順位からそのまま設計者10名が確定したわけではなかった。というのも、5等案は1等の建築家カール・シュナイダーが他の建築家（パウル・A・

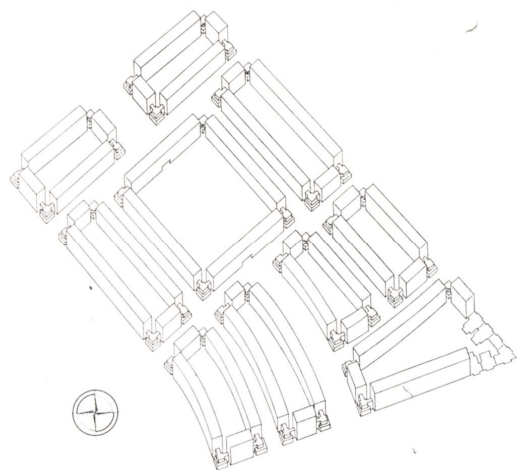


図5 カール・シュナイダー案（1等）のアクソメ図

R・フランク）と共同で作成したものだったため、対象外となった。代わりに11等の作品が10等に繰り上げられた。また、購入対象案の中にも、作成者が事務所として別案を応募し購入対象となっているとの理由で除外された例がある。そのようにして上位の案が外されると下位の案が繰り上げられるかたちとなった。

審査委員会の議事録には、提出された案の多様性のため、このジードルンクの全体計画の方針を提示するのは時期尚早であり、その作業はフリッツ・シューマッハーを筆頭とする建築代表団（Baudeputation）に委ねることが記されている。受賞案に選出された作品に見られる多様性とはどのようなものだったか、簡単に触れておきたい。

建築造形的に見ると、当時興隆してきたノイエス・パウエンの造形が多数を占める。装飾を極力排除し、幾何学的なヴォリュームで建築を造形するものである。そこではバルコニーや階段室によって水平、垂直の要素を挿入し、デザインにアクセントを加えている（図6）。一方で表現主義的な傾向を見せる作品（図7）もあった。住棟の配置計画でも各案工夫を凝らしている。例えば、中央の長方形の緑地の周りを住棟で囲わず、小規模な住棟を空地を挟んで1辺に4棟並べた2等案（図8）や8等案、道路に沿って住棟を直線状に配置するのではなく、コーナー部分で雁行形にセットバックさせた10等案などが挙げられる。

これら多様な案の中で最もシンプルかつ明快な表現と

なっているのが、1等のカール・シュナイダー（Karl Schneider: 1892-1945）の案である（図5, 6）。アクソメ図（図5）からわかるように、基本的に街路に沿って住棟を配置するが、街区の角の部分は上部を開放し、低層の店舗棟を配置している。このように街区の角を開放することで中庭への通気や住棟への採光を確保する計画になっていた。また、住棟は直方体状のヴォリュームを基本とし、角にバルコニーを設けることで造形的なアクセントを与えている。中央の緑地を囲む街区では、中庭側の各層にバルコニーを横断させ、水平性を強調した。シュナイダーは国際的な知名度は高くないが、ヴァイマル期ハンブルクではノイエス・パウエンの代表的建築家であった。ハンブルク市内に複数の集合住宅を設計し、ミヒャエルセン邸（1923-24）など邸宅建築でも名作を残している。

設計競技後に結成された共同作業体によって、敷地全体の模型が作成された（図9）。ここでもまずは住棟の配置とそのヴォリュームの計画に主眼が置かれていることがわかる。続いて図10のように10街区を10組の建築家が設計し、ヤレシュタットの最初の地区は1929年までに²⁷⁾建設されていく。さらにこの地区の東側には、1928-29年にシューマッハー設計の鉄筋コンクリート造の学校が建設され、その周囲にも新たな集合住宅が後に建設される。そのさらに東側の三角形の敷地には、ドイツの住宅建設の経済性を研究する公的機関（Reichsforschungsgesellschaft für die Wirtschaftlichkeit im Bau- und Wohnungswesen: 「建設及び住宅の経済性に関する国立研究協会」、以下RFGと呼

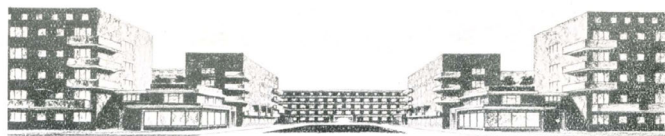


図6 カール・シュナイダー案（1等）の外観透視図

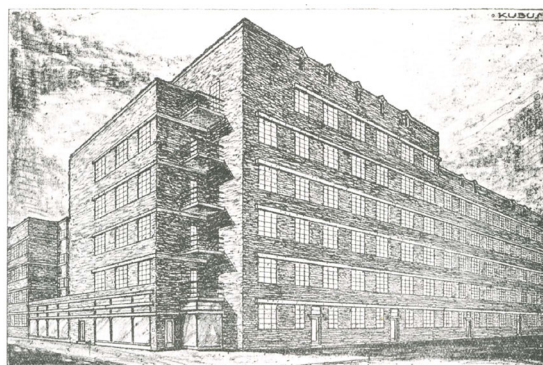


図7 オットー・ホイヤー案（6等）の透視図（図面表現や壁面上部の窓の形に表現主義的傾向が指摘できる）

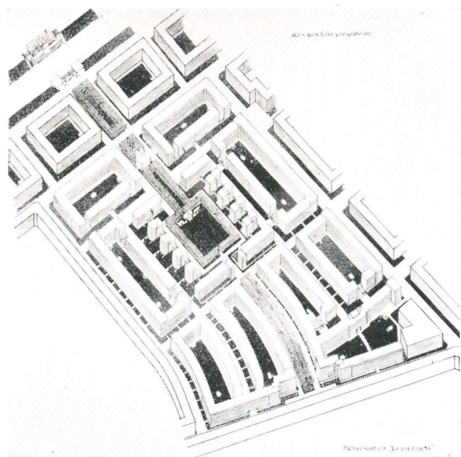


図8 ディステル&グルービッツ案（2等）のアクソメ図

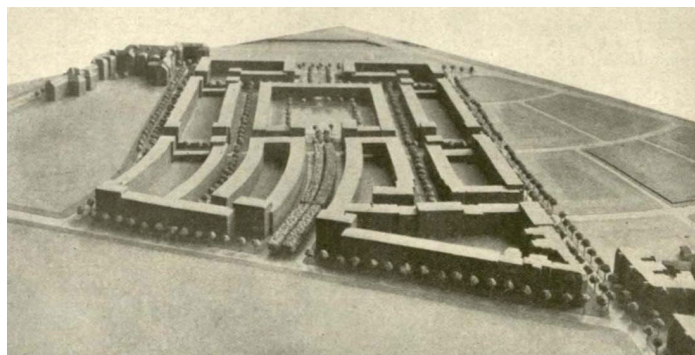


図9 設計競技後に「共同作業体」が作成した敷地全体の模型

ぶ)による集合住宅が1930年頃より建設されることになる。西地区の街区型とは異なり、ここには平行配置型の住棟が建てられる。シュナイダーを含めた4組の建築家に設計が依頼され、比較実験として、伝統的な組積造(Massivbauweise)と鉄筋コンクリート・ラーメン構造(Stahlbetonskelettbauweise)の2種類の住棟が建てられた。その中にはドイツの中でもいち早く外廊下型の住棟をハンブルクで建設していたパウル・A・R・フランク設計の住棟(図11)も含まれていた。外廊下型は従来の階段室型の住棟に比べて建設費削減などが期待された新しい住棟タイプである。この点でも西地区とは異なる実験的な性格が東地区には見られた。一方で建築の外壁に煉瓦を用いる点は、既存の建築群と同様であった。

このようにして現在見るヤレシュタットが形成されていった。なお、このジードルンクは複数の施主によって建設されていた。代表的な事業体として、全ドイツ船大工同業組合、大ハンブルク公益小住居建設会社などがあった²⁸⁾。

4. 住棟の配置計画に見る特徴

4-1. 街区型住棟の形成の背景

前章で述べたように、ヤレシュタットの計画では設計競技の時点から、街区を住棟が取り囲む「閉じた建築配置」が求められた。そして図1に見るように、広い中庭を囲む住棟による街並みが形成された。この建築的特徴を、歴史的な背景にも触れつつ、考えてみたい。

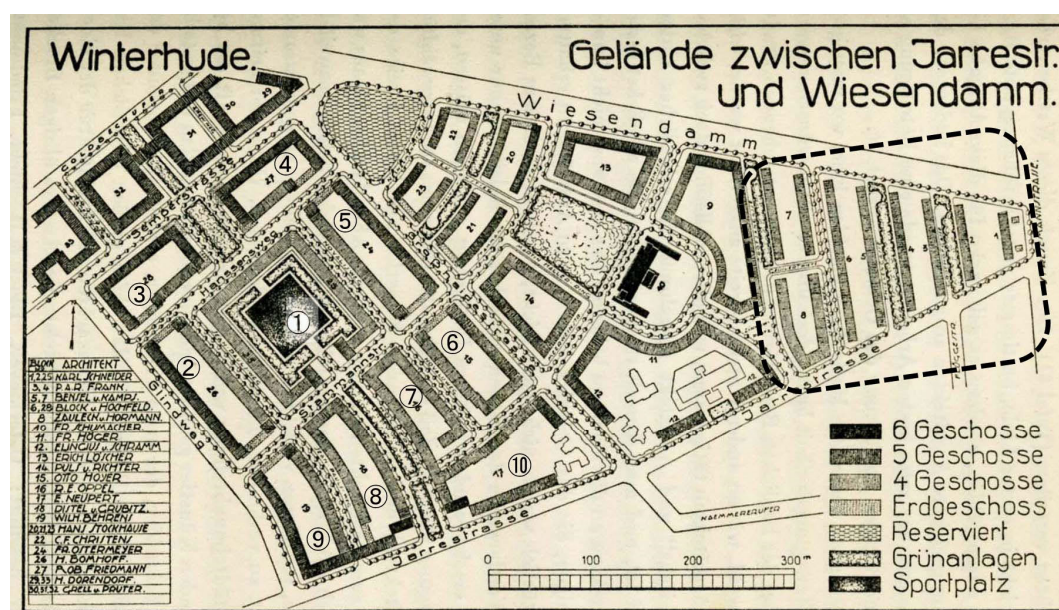
20世紀前半のハンブルクの集合住宅の計画では、ツヴァイシュペナー(Zweispänner)、ドライシュペナー(Dreispanner)、フィーアシュペナー(Vierspänner)といった用語がしばしば登場する²⁹⁾。直訳するとそれぞれ「二頭立ての馬車」「三頭立ての馬車」「四頭立ての馬車」という

意味をもつ。これが集合住宅の用語に転じると、階段室型の住棟において、一つの階段室あたり各階にそれぞれ「2住戸」「3住戸」「4住戸」を置く計画を指す。第2章で1918年制定の小住居建設促進法に言及した際に、各階で一つの階段室あたり3戸以上の住戸を設けない、という規定が示されたと述べた。これはつまりドライシュペナー、フィーアシュペナー式の計画を禁止し、ツヴァイシュペナー式にすることを意味している。

このような規定がわざわざ作られたことが示すように、第一次世界大戦以前のハンブルクでは、ドライシュペナー、フィーアシュペナー式の計画が多くなされていた。一つの階段室あたり多くの住戸を配置し、レントブル比を高めた方が、施主にとっては家賃収入が増え、利点が大き。ゆえに階段室あたり各階3戸、4戸の密な住戸配置が好まれた。しかしそうした場合、階段室は住棟の内側に入り、外部には面さなくなる。また、各住戸においては外部と面する壁の面積が小さくなるため、採光や通気などの居住環境



図11 ヤレシュタット東地区に建設されたP.A.R. フランク設計の外廊下型住棟(2014年2月撮影)



<各街区の設計者>

- ① K. Schneider
- ② H. Bomhoff
- ③ Block & Hochfeld
- ④ R. Friedmann
- ⑤ F. R. Ostermeyer
- ⑥ O. Hoyer
- ⑦ R. E. Oppel
- ⑧ Distel & Grubitz
- ⑨ W. Behrens
- ⑩ E. Neupert

図10 ヤレシュタット全体図(左側の①~⑩の数字を記した地区が本稿の対象の西地区。各街区の設計者を右に記載した。右側の点線で囲んだ地区が1930年代初めに建設された東地区。数字と点線は筆者加筆)

は悪くなる。それを説明するものとして、図 12 のフィアシュペナー式の例を見てみたい。一つの階段室の周りに 4 住戸を配置するため、住棟の奥行きは極端に深くなり、住棟の裏側（左図の上側）に住棟が突き出す形になっている。そして突き出した住棟と住棟の間に切れ目のような空地を設けて各住戸にかりうじて光と空気を入れていた。この住棟形式が第一次世界大戦以前のハンブルクでは普及しており、「奥行きの深い背後棟をもつ建築タイプ（der Bautypus mit tiefen Hinterflügeln）³⁰⁾」あるいは「スリット式建築（Schlitzbauweise）³¹⁾」と呼ばれていた。「Schlitz=細長いすき間」のような空地が設けられているからそのように呼ばれたようである。

フリッツ・シューマッハーは 1932 年の著作『居住都市ハンブルク』において、図 12 のフィアシュペナーの図版を示しながら、「背後棟をもつ建築タイプ」からの住棟形式の転換を説いている。そのようにして集合住宅の構成を変え、都市を構成する組織を健全化していくことが、「新しいハンブルクの最重要な都市計画的変更」だと彼は述べた³²⁾。

ヴァイマル時代に標準とされたツヴァイシュペナーでは、各階段室あたり 2 住戸に限定することで、階段室は外に面した窓を持つようになった。また、住棟の奥行きを浅くして、各住戸において表（街路側）と裏（中庭側）の二方向から採光と通気ができるようになる（図 13）。その結果、住戸内の空気の通り抜けが可能となり、より良い衛生環境が確保されるのである。このような住戸が集積することで、広い中庭を囲む形式の住棟が形成される。それがヤレシュタットで目指されたものであった。ヤレシュタット設計競技の要項の第 3 項でドライシュペナーが住棟の角の階段室のみに認められるとわざわざ記しているのは、それが例外的な措置であることを示している。

4-2. ヤレシュタットの街区型住棟の特徴

さらにヤレシュタットの設計競技では、街区型の住棟を前提としながら、街区を完全には閉じず、住棟の一部を街路に対して開放する、すなわち中庭と街路の間に空隙を設けることが要請された。このような規定も、中庭への通気・採光をよくするという住棟の環境面を意図してのことだった。この規定が設計競技の応募案のヴァリエーションを生みだしているのは興味深い。つまり住棟のどの部分を開くかに計画案の特徴が表れた。前章で言及したシュナイダー案のように住棟の角を開放するものもあれば、街区を囲う住棟の長辺の中央を開けるもの、短辺を全面的に開放するものなどさまざまであった³³⁾。

実現した住棟のかたちは竣工後間もないヤレシュタットの航空写真（図 1）を見るとよくわかる。すべての街区において一箇所もしくは二箇所、住棟の上部が開放されている。矩形の街区の隅近くを開放しているものもあれば、街区の 2 つの短辺を開放し、南北に風が通り抜けるようにしている住棟もある。後者の例としては、中央の正方形街区の東西両隣に配置された 2 つの街区（図 10 の②と⑤）

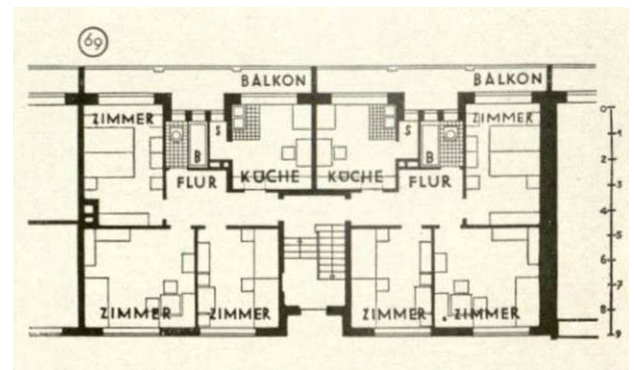


図 13 ヤレシュタットのカール・シュナイダー設計の住棟（街区①）の住戸平面の例

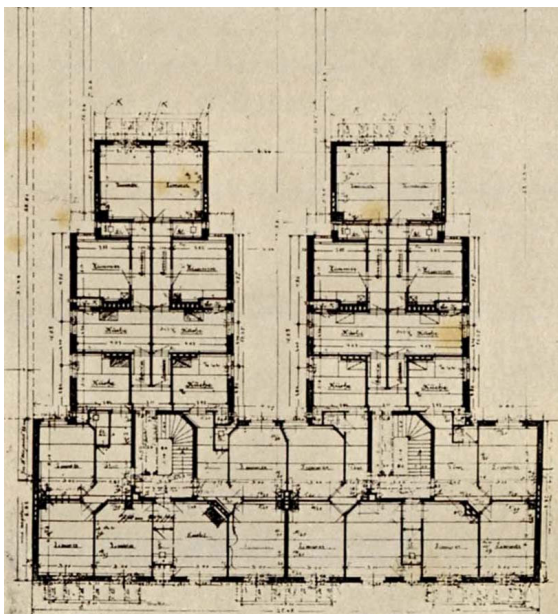


図 12 フィアシュペナー式の住棟の平面図（左）と背面側からの写真（右）

が挙げられる。

これらを現地で地上から確認してみた。図 14 の写真は、図 10 の④の住棟の長辺側の一部が開放されたものである。一方、図 15 の写真は、②の住棟の短辺の上層が開放され、地上部分に低層の店舗棟が横断している。図 16 の写真は、⑦と⑩の住棟の接続部付近に空隙が設けられる例である。これら開放された箇所も地上部分には低層の棟があるため、街路沿いは建築が連続しており、地上レベルでは住棟は「閉じた」街区型になる。一方で図 1 のように上方から眺めたときは、上部が開放されているので、平行配置型の住棟のように見える部分もある。住棟の一部を開放するという共通のルールに従いながら、実際には住棟ごとにヴァリエーションが生じているのは興味深い。

なお、各住棟の中庭の開き方も、現在、街区ごとに違いがある。住棟の住人以外には開放されていない中庭が大半だが、街区⑤のオットー・シュトルテン・ホーフ（F.R.オステルマイヤー設計、施主は全ドイツ船大工同業組合）のように、住棟（階段室）への入口を中庭側に設け、中庭を開放している例も見られる（図 17）。

ヤレシュタットの街区型住棟を象徴するのが、中心にあるカール・シュナイダー設計の正方形の広場を囲む住棟（街区①）である。設計競技の時点ではやや縦長の矩形の緑地として計画されていたが、最終的には一辺 100m の正方形の中庭（広場）へと転換されている。シュナイダーは設計競技の 1 等に出選されたことにより、この中心街区を

担当することになった。街区の一部を開放する方針に従い、緑道の軸が流れ込む南側の辺の中央部が開放された。この開かれた部分の両側部分が 1 層高くなっているため、あたかも広場に入るための門のようにになっている（図 1）。住棟の中庭側では各住戸をバルコニーが横断している。バルコニーの胸壁は白い化粧塗りとなっており、住棟の煉瓦壁とコントラストをなして、水平な白い線が積み重ねられたような印象を与える。バルコニーを用いて建築の水平性を強調しており、シンプルではあるが印象的な住棟デザインとなっている（図 18）。

ヤレシュタットのシュナイダー棟のように、シンボリックな幾何学平面の住棟をもつジードルンクは、ヴァイマル時代にくいつか見られる。代表例として、三重の円環住棟として建設されたフーベルト・リッター設計のライブツィヒのジードルンク・ルントリンク（1929-30）が知られる³⁴⁾。あるいは世界遺産に登録されているブルーノ・タウト設計のベルリンのジードルンク・ブリッツ（第 1 期、1925-26）も、中央に象徴的な馬蹄形の住棟を配した配置計画で特徴づけられる。建築史家ネルディンガーは、カール・シュナイダーを論じた文章の中で、この 3 つの事例を引き合いに出し、それらの住棟が「ヴァイマル共和国における共同社会思想の建築的シンボル」を創り出したものだとして評した³⁵⁾。確かにバルコニーに囲まれた中庭は、ジードルンクという共同体の一体感を生み出す象徴的な空間になったと考えられる。



図 14 街区④の開放された部分。地上部分は 2 層となり、1 階に店舗が入る（2017 年 9 月撮影）



図 16 街区⑦の隅が開けられ、2 階レベルには空中廊下が設けられている（2017 年 9 月撮影）



図 15 街区②の開放された部分。同じく 1 階には店舗が入る（2017 年 9 月撮影）



図 17 街区⑤の立ち入り可能な中庭（2017 年 9 月撮影）

4-3. 街区型から平行配置型へ

ヤレシュタット西地区より遅れて 1930 年頃から建設された東地区の住棟は、西地区とは異なる平行配置型の住棟形式となった（図 10）。両者の違いは 1920 年代後半のハンブルクにおけるジードルンク建設の変化を表しているように思われる。この点についても補足したい。

平行配置型住棟とは、直線状の住棟を空地を挟んで平行に並べる、いわば最も単純な住棟形式である。空地を広く取ることによる衛生環境の改善と住棟の反復による建設の効率性といった利点から、1920 年代後半のドイツで多くの建築家が取り組むようになる。それは、同時期のドイツのジードルンクに見られた、曲線のある街路を設けて変化のある街路景観を創り出す、イギリスの田園都市由来の街区計画に対する一種のアンチテーゼの意味をもっていたと考えられる。事実、新しい平行配置型住棟は、前衛的な近代建築の表現、すなわち装飾のない箱形の建築がただ反復されるという機械のようなイメージを生みだし、ジードルンク建設における一つの流行を作りだした。

1920 年代末の平行配置型住棟の代表例として、ツェレヤカッセルなどで小規模住居を数多く建設したオットー・ヘスラーの作品が挙げられる³⁶⁾。ヘスラーが設計競技で 2 等となり、1 等のヴァルター・グロピウスとともに全体計画を作成した先述のカールスルーエのジードルン

ク・ダマーシュトック（1928-30）も平行配置型に特化した例として有名である。また、エルンスト・マイによるフランクフルトにおける最後のジードルンクの実現例となったジードルンク・ヴェストハウゼン（1929-31）も経済性の要請から成立した典型的な平行配置型住棟の例である（図 19）。そして 1929 年の RFG 主催の設計競技を経て 1930 年代前半に建設されたベルリン・シュパンダウのジードルンク・ハーゼルホルストは平行配置型の最大規模の例となった。ヤレシュタット東地区もこのベルリンの大ジードルンクと同じく RFG の主導で建設されたものである。

ハンブルクにおける街区型から平行配置型への移行という点で注目されるもう一つの例が、ドゥルスベルク・ジードルンクである。これはシューマッハーが古い市街の周縁部に計画した居住地区の一つであり、1910 年代から彼はこの地区の建設計画を改良する計画を進めてきた。1921-23 年にはその一部に自身の設計で、住棟を建設している。

このドゥルスベルクの東地区へのジードルンク建設のための設計競技が、1927-28 年に、ヤレシュタットと同じく抵当貸付基金の主催により実施された。そこでは入賞案の多くが平行配置型住棟による計画となった（図 20）³⁷⁾。そして実現した住棟は、平行配置型の住棟と街区をコの字に囲う住棟が並存する折衷的なものとなる。いずれにしてもヤレシュタットと比べて単調な印象を免れ得ない配置計画となった。その大きな要因は何だったのか。

この設計競技では、可能な限り経済的で、衛生的な小住居・最小住居が求められた³⁸⁾。住宅の大量建設の必要性がさらに高まり、経済性が前面に出てきたことを示すものであった。設計競技の審査では、ヤレシュタットと同様に「都市計画的な解答」「住戸タイプ」「経済性」の 3 点を審査員が点数化する方式がとられたが、その中でも「経済性」に倍の配点が与えられていた。また、床面積 40-48 m²の最小規模の住居が全体の 40%となる計画が求められた³⁹⁾。その結果として住棟形式は、シンプルな平行配置型が多数を占めることになったのである。さらにこの設計競技では、住棟の配置計画以上に住戸平面の問題が前面に出るかたちになった⁴⁰⁾。その際、ヴァイマル期のハンブルクでは否定されていたドライシュペナー、フィアシュペナーによ



図 18 カール・シュナイダーの住棟（街区①）の中庭（竣工時）

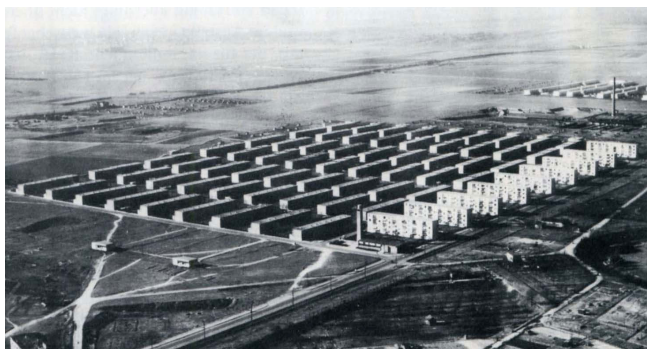


図 19 ジードルンク・ヴェストハウゼン鳥瞰写真（1930 年頃）

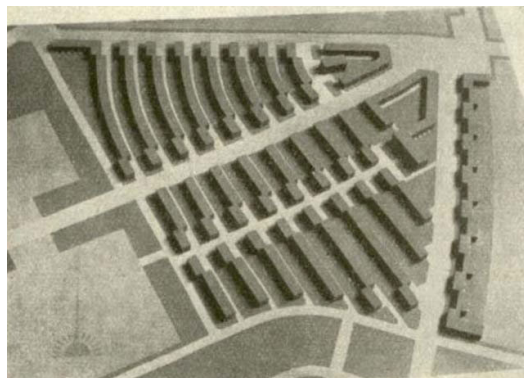


図 20 ドゥルスベルク東地区のジードルンク建設設計競技の 1 等案（ヒンシュ&ダイムリンク設計）

る平面計画が新たにに取り上げられたという⁴¹⁾。

このドゥルスベルク・ジードルンクの例を見ても、1920年代末のハンブルクにおいて、経済的な住宅建設の要請を背景に、住棟の配置計画がより単調なものへとシフトしていく状況が読みとれる。それはハンブルクのジードルンクにおける地域的な特徴が薄れていく過程と見なせるかもしれない。その点でヤレシュタットで実現した独自の街区型の住棟はいっそう意味をもつものと言えるのである。

5. 煉瓦の外壁をめぐる考察

5-1. ハンブルクの建築と煉瓦壁

ヤレシュタットのもう一つの特徴であるファサードの煉瓦壁についても歴史的背景を踏まえて考えてみたい。なお、煉瓦を外壁に露出させた建築をドイツでは一般に Backsteinbau、すなわち「煉瓦建築」と呼ぶが、本稿でも「煉瓦建築」と記した場合、単に煉瓦で構造壁を造る、いわゆる煉瓦造の建築を指すのではなく、煉瓦を外壁に露出させた建築を指すこととする。同様に「煉瓦壁」は煉瓦を外装として用いた壁を指している。

ヴァイマル期ドイツのジードルンクにおける外壁仕上げの方法としては、大きく分類すると、プラスター、漆喰などを用いた化粧塗り（Putz）と、煉瓦（Backstein）を仕上げ材として露出させる煉瓦壁に分けられる。後者は、地域的には北部・西部ドイツにしばしば見られる表現である。例えば 1920 年代のジードルンクの中には、ハノーファーのイン・クロイツカンペのジードルンク（1927-29）や、ブレーメンのビスマルク通りのジードルンク（1929-30、図 21）のように、近代的な造形を試みながら外壁に煉瓦を用いた例が見られる。また、ブルーノ・タウトのベルリンのジードルンク・シラーパーク（1924-30）のように、通常化粧塗りの表現を採る建築家が、煉瓦壁のジードルンクを試みることもある。これらの点から煉瓦壁によるジードルンクの建築は必ずしもハンブルクに限定されないものだとなる。ただし数で見たとき、化粧塗りが多数派であることは確かであり、実際、ベルリン、フランクフルトなどでは平滑な化粧塗りの壁面をもったジードルンクの住棟群が建設され、建築雑誌等で紹介されていく。その時代にヤレシュタットの設計競技では、硬質煉瓦（Klinker）

⁴²⁾でのファサードが規定されていたことは注目される。

ハンブルク歴史博物館が発行した小冊子『ハンブルクの煉瓦建築』⁴³⁾によると、ハンブルクにおいて煉瓦壁の建築が作られ始めたのは 13 世紀初め頃とされる。その後、地産の煉瓦によって、教会建築などを中心に煉瓦建築が建てられた。しかし煉瓦は基本的に高価な建築材料であり、住宅では木造の軸組の間に粘土や煉瓦を充填した、いわゆるハーフ・ティンバーの建築（Fachwerkbau）が一般的であった。他方、18 世紀後半から 19 世紀前半には同時代の流行を受けて、化粧塗りの外壁をもつ建築が増加した。しかし 19 世紀の半ば、とりわけ 1842 年の大火後より、「郷土的な（heimatlich）」表現の一つとして煉瓦をファサード仕上げに用いる建築家が現れてくる。ハンブルクのみならず、北ドイツの伝統的な表現として煉瓦建築に注目が集まってくるのである。現在ハンブルクの観光名所の一つとなっている港沿いの倉庫群（Speicherstadt：第 1 期は 1885-88 年建設、図 22）も、19 世紀後半の煉瓦建築の成果の一つである。そして 19-20 世紀転換期に高まる郷土様式（Heimatstil）の流行により、煉瓦建築を郷土の伝統と結びつける意識がさらに高まった。表現主義建築の代表作として知られるフリッツ・ヘーガーのチリハウス（1924 年、図 23）は、このような文脈から生まれたものと考えられる。チリハウスの周辺には、同様に煉瓦壁のファサードをもつ大規模な事務所建築が集積し、商館地区（Kontorhausviertel）を形成している。この場所は、かつてハーフ・ティンバーの住宅が密集していた古い街並みを、衛生的観点から 20 世紀初頭に再開発して成立したものであった⁴⁴⁾。



図 22 ハンブルクの倉庫群（2009 年 8 月撮影）



図 21 ビスマルク通りのジードルンク（2016 年 2 月撮影）



図 23 チリハウス（2009 年 8 月撮影）

この例のようにハンブルクの伝統的な建築の姿が近代において、いわば新たに創り出されていくのである。そして1920年代にハンブルクの煉瓦建築は頂点を迎える。

5-2. シューマッハーによる煉瓦の使用の論拠

20世紀前半のハンブルクに煉瓦建築の隆盛をもたらした建築家がフリッツ・シューマッハーである。すでに述べたように、彼は1909年にハンブルクの上級建築監督官に着任し、同市の都市改造に着手した。前述した商館地区の再開発も彼の主導で実現したものである。また彼は学校や博物館、役所、監獄、火葬場といった都市の公共施設を煉瓦の外壁をもつ建築として設計していった。これらの多くは、構造は鉄筋コンクリート造であり、外壁を覆う素材として煉瓦が用いられた。

シューマッハーの煉瓦の使用に関する面白いエピソードがある。彼がハンブルクで力を入れた計画の一つに、ヤレシュタットの北側に広がる都市公園の整備があった。そこに彼は市民ホール（Stadthalle、現存せず）など多くの建築を計画している。実はそれらは、シューマッハーが前任地のドレスデンで1909年に設計したものであり、もともとの設計では煉瓦ではなくドレスデンでよく用いられる砂岩（Sandstein）で外壁を作る計画だったという⁴⁵⁾。それがハンブルクに適用される際に、煉瓦建築に転換されたのである。このことからわかるように、シューマッハーにとって、もともと煉瓦は建築を被覆する唯一の素材であったわけではなく、あくまでハンブルクの文化・風土を考慮した上で選択されたものだった。事実彼は1923年に、ハンブルクにおける19世紀中盤の煉瓦建築の復興を解説した論文を建築雑誌に寄稿しており、彼のハンブルクにおける煉瓦建築の実践は、歴史的な研究を踏まえた上でのものだったことがわかる⁴⁶⁾。

1932年の『居住都市の生成』の中でシューマッハーは、都市の住宅を煉瓦建築で建設することの効果を次のように述べている。まず彼は、ハンブルクの新しい居住地区には、他の多くの大都市と比べてときに際立つ統一された印象が現れると言う。その理由は、第一に素材の統一性、すなわち煉瓦の使用にあるとする。そして次のように語る。

「しかし煉瓦の統一性にはまったく特別な何かが備わっている。これらのすべての建築が化粧塗りや石材によって同じように統一して建設された場合、多様な建築家に対して、おそらくこのような同質の音が生まれることはないだろう。煉瓦そのものが自ら似通った表現になっていくということ、言い替えれば、煉瓦がただ外見において結びつく『建築素材』であるだけでなく、無意識的に結びつく『建築方法』となるということは、まさに煉瓦の健全な扱いの本質にあることなのである。煉瓦が内にもつこの秩序付けられた力は同時に、仮に煉瓦を完全に偏見なく新しい時代の意識で扱ったとしても、目下「近代(modern)」として意識されているものとは違う特徴が明瞭に現れることになる。煉瓦はその構造の本質から生じるかすかな伝統的特徴によって、あらゆる新しい作用を和らげる。そのことは、

頭の中でハンブルクの新しい地区をフランクフルトのそれと比べてみればはっきりと認識できるだろう。もしもフランクフルトの建築のヴォリュームを突如煉瓦に置き換えてみたら、純真に伝統を求める観測者にとって、それらはずっと目立たないものに見えるだろう。確かに言えるのは、新しい建築的信念の革命性は素材の選択によって和らげられたということである。⁴⁷⁾

やや難解な物言いだが、シューマッハーは煉瓦という素材がもつ特別な力、すなわちさまざまな建築家の表現に統一感を与え、また近代の建築家の過度な前衛性を和らげるような力を信頼し、その使用を主張することで大都市の住宅地区に統一された姿を与えようとしたのではないだろうか。

さらにシューマッハーは、別の文章で街路のことを「群衆の居住空間(Wohnraum der Massen)」と呼んだという⁴⁸⁾。「壁がさまざまな色で飾られていたら住みよい空間にはならない」と彼は語り、煉瓦による外観の統一性を主張したのである。

このようなシューマッハーの姿勢に対して、当時反発もあった。その一例として、ハンブルクで活動した建築家ラングロー兄弟(Ernst und Wilhelm Langloh)がいる。パウハウス風の白を基調とした近代的な学校建築(ニーンドルフの中学校、1927-29)を設計した彼らは、ル・コルビュジエの信奉者であり、1931年に出版した自著『技術と建築の新しい統合』をル・コルビュジエに捧げている。彼らは、同書の中でハンブルクの建築行政による「煉瓦の強要(Backstein-Diktat)」を次のように非難している。

「薄暗く重く、押しつぶされるように陰鬱でほとんど真っ黒な大きな硬質煉瓦の壁面によって、再開発地区には新しい商館地区が成立している。(・・・)しかし、商館地区の外でも、煉瓦による住棟、長い街並み、市域全体が建設されている。役所がそれを求めている。(・・・)彼らが考えていることは、色が風化し、化粧塗りのファサードが汚くなることを防ぐことか!? 高価な煉瓦建築ならば将来の手入れは少ない、だから色は消滅しなければならないのか!? われわれは言いたい。より安価な化粧塗りのファサードで建てるのを補助すべきだと。下水道管料金と同様に色の料金を土地に課して、州が定期的に道路沿いのすべての住宅に芸術的に新鮮で楽しげな色を与えるようにと。⁴⁹⁾

経済性という根拠を示しながらも、それ以上に美的な好みからラングローは「薄暗い」煉瓦壁ではなく、さまざまな色を与えられる化粧塗りのファサードを求めている。そこにはハンブルクの煉瓦建築の古風な表現に反して、当時の国際的な流行に追随しようとする建築家の姿勢が見られる。実際、ル・コルビュジエのボルドー近郊ペサックの住宅団地(図24)にせよ、ブルーノ・タウトのベルリンのジードルンク群(図25)にせよ、この時代の近代建築家たちの先端的なジードルンクは、多かれ少なかれ外壁への彩色を表現手段の一つとしていた。ハンブルクでもそれを求める立場がいたことは興味深い。

5-3. 近代建築と煉瓦

しかしここでまた、「化粧塗り」を近代的とし、「煉瓦壁」を伝統的と見がちな図式自体も検討しておかなければならない。というのも、一般的に前衛的と見られる建築家の作品において、煉瓦は必ずしも相容れない素材ではないからである。例えば、1926年にデッサウのバウハウス校舎（図26）でインターナショナル・スタイルの代表作を世に問うたヴァルター・グロピウスも、出世作であるファグス靴型工場（1911-13）では黄色がかった煉瓦を外壁の素材として用いているし、バウハウス校舎よりも後に同じデッサウに建設した労働局（1928-29、図27）も同様の煉瓦壁を見せている。また、同じくドイツ出身の近代建築家の筆頭であるミース・ファン・デル・ローエも、ブルノに建つ「白い」トゥーゲントハット邸（1929-30、図28）と同時期にドイツのクレフェルトに煉瓦の外壁をもつランゲ邸（1928-30、図29）を竣工させている。さらに彼が1938年に移住したアメリカで、イリノイ工科大学の建築の設計において、鉄骨の間を煉瓦壁で充填する表現を用いていたことも指摘できる。

ヤレシュタットの建築家シュナイダーにもこのような二面性は指摘できる。彼はハンブルクのジードルンクでは煉瓦壁の住棟を建設する一方で、他都市のエアフルトのジードルンク（1929-31、図30）では似たような住棟デザインを提案しながら化粧塗りで仕上げており、地域に応じて



図26 デッサウのバウハウス校舎（2013年3月撮影）



図27 デッサウの労働局（2013年11月撮影）



図24 ペサック住宅団地（1924）（2016年9月撮影）



図28 トゥーゲントハット邸（2015年3月撮影）



図25 B. タウト設計のトリイラーシュトラッセの住棟（1925-26）（2017年9月撮影）



図29 ランゲ邸（2017年9月撮影）

外壁の表現を変えている⁵⁰⁾。

これらの諸例から言えることは、煉瓦は伝統的なイメージを喚起させる素材であったとしても、近代的な表現に必ずしも反するものではないということである。サヴォア邸（1929-31）などル・コルビュジエの1920～1930年代の一連の白い住宅やバウハウス校舎、1927年のシュトゥットガルトのヴァイセンホフ・ジードルンクの住宅群などによって、白を基調とした化粧塗りのファサードがこの時代の新しい建築のイメージを形成したが、煉瓦もまた、近代建築の一つの表現だったことを指摘したい。もともと組積造の伝統の中から出てきたヨーロッパの近代建築家にとって、煉瓦をいかに扱うかも重要なテーマであったに違いない。

実際、煉瓦の外壁には次のような利点がある。

まず、ラングローも挙げていた耐久性である。化粧塗りのファサードは竣工したときが一番美しく、その後年月とともに劣化していく。それに対して煉瓦は長く維持され、年月が経つとともに出る味わいもある。建設にかかる費用も、必ずしも煉瓦が化粧塗りに対して高価とは言えず、当時両方の主張があったようである⁵¹⁾。

また、煉瓦は焼き具合によってさまざまな色がでる。それによって素材そのものから色彩的な表現の多様性が生まれる。彩色ではなく、素材に基づいた色の真正性を重視する立場からすれば、煉瓦そのものが生み出す色合いは好まれるはずだ。



図30 エアフルトのジードルンク（2016年3月撮影）



図31 ランゲ邸 2階の窓周り（2017年9月撮影）

さらに煉瓦積みはその目地によって水平線が表現される。これは近代建築でしばしば好まれた水平性の表現を補助するものと見なせるかもしれない。さらに煉瓦は外観における整然とした比例関係を明示する要素ともなる。例えばランゲ邸で、ミースは整ったイギリス式の煉瓦積みを採用している（図31）。それによって、窓の幅は煉瓦の小口の整数倍、窓の高さは煉瓦一個の高さの整数倍として示された。設計者にとっては自明のことかもしれないが、ファサードにおける諸要素の規模や関係性を示そうとした場合、煉瓦は化粧塗りに比べてより率直に建築家の設計意図の表現手段となるのではないか。

このような煉瓦の特性を考慮するならば、シューマッハーによる煉瓦建築の積極的な推進はさらに評価できるように感じている⁵²⁾。現時点ではこれ以上の考察を加える余裕はないが、さしあたり、ヤレシュタットを観察した結果から、最後にこのジードルンクの建築に見られる一つの特徴を指摘しておきたい。

ヤレシュタットでは、確かに煉瓦壁の外観によって地区全体に統一性が生まれている。しかし一つ一つの住棟を見てみると、細部においてさまざまな表現がなされていることがわかる。それを豊かにしているのが煉瓦による表現である。例えば、階段室の入口周りの造形（図32）であったり、窓周りの造形（図33）であったり、ファサードを分節する縦横のライン（図34）だったりする。それは確かに装飾的な付加物ではあるが、外観に変化を与え、ジードルンク内の空間を豊かにする要素となっている。多様性の統一と同時に統一性の中の個性を生み出しているのが、煉瓦という素材なのである。そのことをヤレシュタットの建築を検討することで改めて知ることができる。

6. おわりに

本稿ではドイツのハンブルクに1920年代後半に建設されたジードルンク、ヤレシュタットの成立過程を整理した上で、その建築の特徴を、ハンブルクのジードルンクに特徴的と考えられる2つの点に注目しながら考察した。

一つは街区型の住棟形式である。この住棟形式は近代ハンブルクの住宅建設の展開の中から生まれてきたものであり、設計競技の時点から要求されていた。街区を囲う住



図32 街区⑤の住棟の階段室入口（2017年9月撮影）

棟自体は決してハンプルク固有のものではないが、ヤレシュタットでは街区を完全に住棟で閉じることはせず、住棟の上層の一部を開放するという独特なルールが示された。それによって街路沿いの低層部には煉瓦壁の建築が建ち並び、統一感が得られる一方で、開放箇所の設け方により住棟間に変化を与えていた。これは 1920 年代後半のヤレシュタットで実現した固有の住棟形式と言える。続く時期のハンプルクではより単調な平行配置型の住棟が普及していくことから、ヤレシュタットでの独自の住棟の提案は注目すべきものである。

もう一つの特徴は煉瓦の外壁である。これもハンプルク近代における煉瓦建築の興隆を背景として、設計競技で規定されたものであった。煉瓦という地域と結びついた伝統的な素材を遵守することで、ヤレシュタットは統一感のある落ち着いた外見を得ることになる。10 組の建築家が設計に参画する中で、建築家の表現の間に統一性をもたせたのが煉瓦だった。他方、実地で建築を観察すると、統一性の中に各建築家の個性が煉瓦の扱い方を通して見られた。煉瓦壁は多様性に統一を与え、同時に統一性の中の個性を示すものだったと指摘できる。

この 2 つの特徴に影響を与えたのがフリッツ・シューマッハーだった。彼は日本ではほとんど言及されず、国際的な知名度はあまり高くないが、伝統を重視した近代建築家として、その数々の試みは改めて評価されてよいだろう。本稿ではシューマッハーについては十分に論じられな

ったが、今後の課題としたい。

最後にヤレシュタットの建設後の変遷を補足しておきたい。

ドイツ都市の例に漏れず、ハンプルクは第二次世界大戦の空襲で大きな被害を受けた。全住居の半数以上の約 30 万戸が戦争で破壊され、無傷の住居はわずか 5 分の 1 にすぎなかったという⁵³⁾。ヤレシュタットは 1943 年 7 月 24～25 日、29～30 日の空襲で決定的な被害を受けた。

すでに戦中より建築家コンスタンティー・グートショウは、ヤレシュタットを含むシューマッハー時代の複数のジードルンクを、戦後に優先的に再建する計画を作成していた。それを受けて 1947 年のハンプルクの総合建設計画においてヤレシュタットの再建が決められ、優先的に建設資材が割り当てられることになった。再建は基本的に当初の計画に基づいて、1952 年までに実施された。その際、屋根階が増築される例もあった。

また、戦後の住宅窮乏期に住戸数を確保するために、かつて原則とされたツヴァイシュペナーの住戸平面をドライシュペナーに変更し、床面積が小さくなる住戸も見られた。さらに外観における改変として、窓の変更があった。1920 年代に用いられていた横棧窓が、再建に当たり、棧による分割のない新しい形式の窓に変えられる例がしばしば見られた。現在ヤレシュタットを歩くと、伝統的な横棧窓を維持している場所もあれば、同じ住棟であっても新



図 33 街区⑨の住棟の窓周りの表現 (2017 年 9 月撮影)



図 35 街区⑩の住棟の窓 (左が横棧窓、右が新しい窓) (2017 年 9 月撮影)

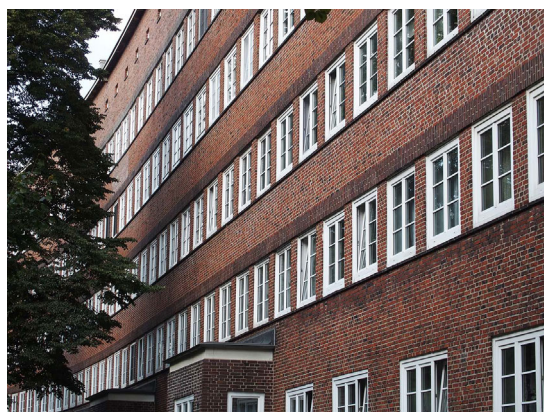


図 34 街区⑨の住棟のファサード (2017 年 9 月撮影)



図 36 シュナイダー棟 (街区①) の中庭 (2017 年 9 月撮影)

しいタイプの窓に変えられている場所もあることがわかる(図 35)。窓枠を棧で分割しない 1 枚ガラスの窓は断熱性や掃除のしやすさなどで利点があり、現在も受け入れられているという。ただし文化財保護の専門家 H. ヒップによれば、横棧窓は水平の棧が煉瓦壁の水平目地と呼応する点で、ファサードの表現上重要なものとなる⁵⁴⁾。そのような点からハンブルクでは、1980 年代に市内の主要な歴史的建築の窓を横棧窓に戻すための助成金も用意された。この試みによって横棧窓を取り戻した例も見られる⁵⁵⁾。

ヤレシュタットの中心にあるシュナイダー棟では、後の改修によって、当初見られた正方形広場を囲うバルコニーの白い胸壁が部分的に金属製の手すりに変えられてしまった。それによってネルディンガーが指摘した共同体の場を演出する造形的な一体感は失われてしまったことになる。ただ、現状をみるとそれはあまり関係がなくなっているように感じる。筆者が最後にここを訪問したのは 2017 年 9 月初めのよく晴れた一日だった。一辺 100m の正方形の広い中庭(広場)には木が生い茂り、かつてのように周囲の住棟を水平に横断するバルコニーを見渡すことはできない状態だった(図 36)。広場には数カ所の子供の遊び場や滞在スペースが設けられ、住人たちが思い思いに午後の時間を過ごしていた。子供たちの遊ぶ声が響き、時折自転車中央の小径を通り過ぎていく。そこには長い時間のなかで育まれてきた日々の生活の場があった。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 15K06408 基盤研究(C)「ヴァイマル期ジードルンクを糸口としたモダニズム住宅の国際性と地域性に関する研究」(研究代表者: 海老澤模奈人)の成果の一部です。本稿執筆にあたり、ヤレシュタット史料室の Frau Petra Ziems と Frau Ulrike Sparr 両女史から助言と資料の提供を得ました。記して謝意を表します。

注

- 1) Dirk Schuber, *Hamburger Wohnquartiere: Ein Stadtführer durch 65 Siedlungen*, Berlin, 2005, p.46
- 2) Winfried Nerdinger (Hrsg.), *Architekturführer des 20. Jahrhunderts - Deutschland*, Basel/Berlin/Boston, 1996
- 3) Hänsel/Kruger/Noack/Priess/Scholz/Sdunnus, *Die Jarrestadt: Eine Hamburger Wohnsiedlung der 20er Jahre*, Hamburg, 1981。全 68 ページのタイプ打ちの報告書のような冊子である。筆者が 2016 年 3 月にヤレシュタット史料室を訪問した際にコピーを提供された。1981 年末にハンブルクのドイツ劇場で開催されたヤレシュタットの展覧会のために作成されたものであり、謝辞を読むと専門家の序言のもと在野の有志がまとめたもののようである。ヤレシュタットの成立過程や建築について包括的に論じたものとしては唯一のものと思われる。
- 4) ヤレシュタット史料室は、これまで以下の 3 冊の冊子を発行している。①Elke Groenewold / Ulrike Sparr, *Zwischen Neubau und Zerstörung. Die Jarrestadt 1929 bis 1945*, (Hrsg.

von Jarrestadt-Archiv), 2003, ②Alexander Reinfeldt, *Zwischen Wiederaufbau und >Wirtschaftswunder<. Die Jarrestadt in den langen 1950er Jahren*, (Hrsg. vom Jarrestadt-Archiv Hamburg), 2011, ③Ulrike Sparr, *Seifen-Fabrik Karl Walter. Ein Stück Industriegegeschichte an der Jarrestraße*, (Hrsg. von Jarrestadt-Archiv), 2011。いずれも 40~50 ページほどの冊子であり、建築についても触れられるが社会史的な面が多くを占める。①がヤレシュタットの成立の経緯を、②が第二次世界大戦後の変遷を紹介している。②と③はヤレシュタット史料室のホームページ (<http://www.jarrestadt-archiv.de/>) から PDF ファイルでダウンロードできる。

- 5) 主なものに、Hermann Hipp, *Wohnstadt Hamburg: Mietshäuser zwischen Inflation und Weltwirtschaftskrise*, Berlin(nicolai), 2009 (1982 年出版の同名の著作の新版) や、Schuber, op.cit., pp.154-157 がある。
- 6) 現在ハンブルク州(市)に含まれる Harburg、Wandsbek、Altona の 3 つの地区は、ヴァイマル共和国時代はプロイセン州に属す、それぞれ独立した都市であった。この 3 地区は 1937 年以降ハンブルクに編入された。ヴァイマル期の住宅建設ではハンブルク周辺のこれらの都市も重要な成果を収めていた。
- 7) Schuber, op.cit., p.41
- 8) Ibid., p.46
- 9) 家賃税については、柳沢のどか「1920 年代ドイツにおける住宅供給と市議会 - ゴーリンゲン市の事例」『一橋経済学(第 2 巻・第 2 号)』2008 年 1 月, pp.179-201、および後藤俊明『ドイツ住宅問題の政治社会史』未来社, 1999 を参照した。
- 10) Fritz Schumacher, "Hamburgs Wohnungspolitik", *Die Baugilde*, 1928, pp.395-399 (該当箇所は p.395)
- 11) Schuber, op.cit., p.46
- 12) Ibid., p.42
- 13) Schumacher, op.cit., p.397
- 14) Hipp, op.cit., p.15。なお、ここでの部屋数は、台所(Küche)を除いた、主に居間と寝室をあわせた室(Zimmer)の総数を指すものと考えられる。
- 15) Ibid., pp.56-73
- 16) CIAM (Congrès Internationaux d'Architecture Moderne) とは、1928 年に結成された近代建築家たちによる会議。各回テーマを決めて当時の課題であった住宅や都市の問題を議論した。ドイツ語名称は「Internationale Kongresse für Neues Bauen」であった。
- 17) Hipp, op.cit., pp.83-84。なおこの数字にはアルトナなど当時の隣接都市も含まれている。ちなみにアルトナ(1938 年にハンブルクに統合)では、1920 年代にグスタフ・エルスナー(Gustav Oelsner)が、ハンブルクにおけるシューマッハーのような役割を担い、都市計画や住宅建設を主導し、ノイエス・パウエンのデザインを展開している。
- 18) ヤレシュタット建設設計競技に関する同時代資料として、主に以下を参照した。Prof. A. Neumeister / E.Deines (Hg.), *Bau-Wettbewerbe: Heft 11. Bebauung an der Jarrestraße in Hamburg*, Selbstverlag-Karlsruhe, Feb.1927. / "Bebauung der staatlichen Grundstücke an der Jarrestraße in Hamburg", *Deutsche Bauzeitung. Wettbewerbe*, 1927, pp.29-37, 47-48. / Fritz Block, "Der Hamburger Wettbewerb für ein Groß-Wohnhaus-Viertel an der Jarrestraße", *Baugilde*, 1927, pp.71-73。また、注 1~5 に記した先行研究も適宜参照した。
- 19) Block, op.cit., p.72
- 20) Neumeister, op.cit., p.3
- 21) Ibid., pp.2-3, 46 に記載。
- 22) 要項には「in der Breite eines Hauses」と記されている。こ

- こでの「Haus」は階段室を中央に置いた両側 2 住戸の単位を指すと思われる。そのため本稿では「一階段室単位の幅」とした。
- 23) Block, op.cit., p.72
- 24) Neumeister, op.cit., pp.46-49
- 25) Hänsel, op.cit., p.7
- 26) このような数値化を求めたのはタウトとされる (Schuber, op.cit., p.154)。
- 27) Georg Dehio *Handbuch der deutschen Kunstdenkmäler: Hamburg, Schleswig-Holstein*, Berlin/München, 2009, pp.142-143
- 28) Schuber, op.cit., p.155
- 29) この用語は同時代の他都市のジードルンク計画では、筆者はほとんど見たことがない。おそらくハンブルク特有の表現なのではないか。
- 30) Fritz Schumacher, *Das Werden einer Wohnstadt*, Hamburg, 1932, p.27. こでの「Vierspänner」の説明は、同書の pp.27-30 を参照。
- 31) Rolf Spörhase, “Vom Hamburg-Altonaer Wohnungsbau”, *Moderne Bauformen*, 1929, pp.489-512 (該当箇所は p.489)
- 32) Schumacher, op.cit., p.29
- 33) 設計競技を評した雑誌記事の中には、多くの建築家が住棟の一部を開放するという要求を理解していないとの指摘もあった。理由は、多くの計画案で、主に風が流れる向きである東西方向で街区を開放しているからである。この評者である建築家フリッツ・ブロックは、中庭は憩いの場として確保されなければならないから、車通りから離れるように住棟の空所を設けるべきと述べた。そして長手の方に住棟が開放されるかたちで最終案が作成されるべきとした (Block, op.cit., p.72)。
- 34) ジードルンク・ルントリンクに関しては、拙稿「フーベルト・リッターのジードルンク・ルントリンクにおける住戸平面タイプについて」『2016年度大会 (九州) 学術講演梗概集 (建築歴史・意匠)』、日本建築学会、2016年8月、pp.783-784を参照。
- 35) Winfried Nerdinger, “Karl Schneider und die Moderne”, in Robert Koch / Eberhard Pook (Hrsg.), *Karl Schneider. Leben und Werk (1892-1945)*, Hamburg, 1992, pp.47-54 (該当箇所は p.50)
- 36) ヘスラーと彼のジードルンク計画については、拙稿「オットー・ヘスラーのジードルンク・ブルームレーガー・フェルトにおける最小限住居の成立と変遷」『日本建築学会計画系論文集』No.696, 2014年2月, pp.525-533を参照。
- 37) Fritz Schumacher, “Kleinstwohnungen. Ein Hamburger Wettbewerb”, *Deutsche Bauzeitung. Wettbewerbe*, 1928, pp.49-57. 1等とは Walther Hinsch と Erwin Deimling の組で平行配置型である。2等選ばれたカール・シュナイダーは街区型を基本とした案を出しているが、もう一人の 2等 P.R. フランクは純粋な平行配置型を採用している。
- 38) Spörhase, op.cit., p.490
- 39) Schumacher, op.cit., p.51
- 40) Spörhase, op.cit., p.490
- 41) ただし、第一次世界大戦前の衛生環境の悪い Vierspänner ではなく、発展する可能性を残した Vierspänner の計画であった。すなわち、最初は階段室あたり 4 住戸が玄関をもつ最小規模の住居平面をもつが、将来的に 2 戸ずつを 1 住戸へと統合し、Zweispänner へ変容させる、可変性をもつ住戸の提案であった。(Ibid.)
- 42) Klinker とは、レクラムの『建築辞典』によれば、「酸、アルカリ、圧力、湿気に対して抵抗できるような特別な粘土の混合物を原料として、高温で焼成した固い煉瓦」である (Wörterbuch der Architektur, Stuttgart, 2010(13.Aufl.), p.69)
- 43) Lutz Tittel, *Backsteinbau in Hamburg*, Hamburg, 1977. 本段落は主に同書を参考にした。
- 44) Dominik Schendel, *Architekturführer Hamburg*, Berlin, 2013, pp.118-119
- 45) Tittel, op.cit. (ページ記載なし)、および Hermann Hipp, “Backsteinbau in Hamburg”, 1984 (Dietmar Brandenburger, Gert Kähler, *Architektour. Bauen in Hamburg seit 1900*, Braunschweig/Wiesbaden, 1988, pp.158-160 に再録)
- 46) Fritz Schumacher, “Die neuen Regungen des Hamburger Backsteinbaus in der Mitte des 19.Jahrhunderts”, *Zentralblatt der Bauverwaltung*, Berlin, 1923, pp.61-65, 73-78, 85-86, 133-138
- 47) Fritz Schumacher, *Das Werden einer Wohnstadt*, pp.83-84
- 48) Hänsel, op.cit. p.23. 続く引用部分も。
- 49) Roland Jaeger, “»Dem Meister Le Corbusier« - die Schule Langloh”, *Architektur in Hamburg. Jahrbuch 1994*, (Hrsg. von der Hamburgischen Architektenkammer), Hamburg, 1994, pp.130-139 (該当箇所は p.137)
- 50) やや論点はそれるが、シュナイダーの設計で 1923-24 年にハンブルクに建設されたミヒャエルセン邸 (Haus Michaelson) も興味深い。この邸宅は L 字形に低層の棟が伸び、その隅部に直方体状のヴォリュームを置いた近代建築である。白い外観となっているが、実は煉瓦の外壁を白く塗っている。このような壁の仕上げは煉瓦壁と化粧塗りの折衷的な表現と言えるかもしれない。
- 51) Hänsel, op.cit. p.13
- 52) シューマッハーは 1917 年に『新時代の煉瓦建築の本質』(Fritz Schumacher, *Das Wesen des neuzeitlichen Backsteinbaues*, München, 1917) という著作を著し、同時代の建築に煉瓦を用いる方法について体系的に論じていた。本稿では同書の内容を検討することはできなかった。今後の課題としたい。
- 53) Reinfeldt, op.cit. 以後の戦中・戦後の記述も同書を参照。
- 54) Hipp, op.cit., (*Wohnstadt Hamburg*), p.130
- 55) Gert Kähler, “Denkmalschutz versus Rettung der Welt”, in: Hipp, op.cit., pp.VII-XXI

図版出典

- 図 1, 3, 10, 12, 18 : F.Schumacher, *Das Werden einer Wohnstadt* (図 10 は筆者加筆)
- 図 2 : *Die Baugilde*, 1928, p.398
- 図 4~8 : *Bau-Wettbewerbe: Heft 11. Bebauung an der Jarrestraße in Hamburg*
- 図 9 : *Deutsche Bauzeitung. Wettbewerbe*, 1927, p.48
- 図 13 : *Moderne Bauformen*, 1929, p.501
- 図 19 : Christoph Mohr / Michael Müller, *Funktionalität und Moderne: Das Neue Frankfurt und seine Bauten 1925-1933*, Köln, 1984, p.51
- 図 20 : *Deutsche Bauzeitung. Wettbewerbe*, 1928, p.53
- 図 11, 14~17, 21~36 : 筆者撮影